

史跡としての平城宮跡

2002.5.10 笹山晴生

I 調査・保存の沿革

(1) 平城京と平城宮

- 710 (和銅3) 元明天皇、藤原京から平城京へ遷都。
- 740 (天平12) 藤原広嗣の乱。聖武天皇、恭仁京へ遷都。
- 745 (天平17) 天皇、平城京へ帰還。
- 784 (延暦3) 桓武天皇、長岡京へ遷都。
- 809 (大同4) 平城上皇、京都より移る。翌年、平城遷都を企てるが失敗、出家。
(中世には興福寺・東大寺を中心とした外京の地が繁栄。宮跡・左右京は水田化)

(2) 近世以降の調査と保存

- 1852 (嘉永5) 北浦定政、『平城大内裏坪割図』を著わす。
- 1907 (明治40) 関野貞、『平城京及大内裏考』を著わす。
- 1913 (大正2) 「奈良大極殿址保存会」設立(榎田嘉十郎らの保存運動)。
- 1922 (大正11) 大極殿・朝堂院跡の一郭を史跡に指定。

(3) 戦後の保存の経緯と調査の進展

- 1954 (昭和29) 県道拡幅工事に伴い遺構発見。
- 1955 (昭和30) 本格的発掘調査開始。多くの遺構・木簡など発見。
- 1962 (昭和37) 近鉄の検車区建設計画、全国的な保存運動おこる。
(宮跡全域の国家による買い上げ決定。奈良国立文化財研究所の機構拡充、
発掘調査体制の整備)
- 1964 (昭和39) 国道24号線バイパス計画に伴う調査。
(宮域の東への張り出しを確認。バイパス計画を変更。)
- 1988 (平成元) 長屋王邸宅跡から大量の木簡出土。
- 1997 (平成9) 朱雀門復元竣工。
- 1998 (平成10) 「古都奈良の文化財」、世界遺産に登録。
(東大寺・興福寺・春日大社・春日山原始林・元興寺・薬師寺・唐招提寺
・平城宮跡の8件で構成)

II 発掘調査の成果

(1) 平城宮の構造

宮域の問題－東院の存在

諸殿舎の配置とその変遷－大極殿・朝堂院と内裏／諸官衙の配置

(2) 出土遺物と木簡

木簡－貢進物付札／官人の考選・当直／伝票／召喚状／告知札など各種

当時の政治・社会の究明に大きく貢献

官庁用の文房具－筆・墨・硯・小刀

祭祀遺物－人面土器・人形・土馬

(3) 平城京跡の調査

皇族・貴族の邸宅－長屋王邸宅跡／左京三条二坊宮跡庭園

朱雀大路／羅城門／西市／庶民の住居

都市化の進行と調査・保存の困難性

III 史跡としての意義

(1) 歴史の舞台

都城の構造とその性格－日本の古代国家の特質と関連

律令政治の様相－行政機構（中央・地方）／官僚制度／貢納制度

皇族・貴族の生活－家政機関／経済的基盤／生活の実態

(2) 良好に保存された遺跡

地下の遺構・遺物が良好な状態で広範囲に保存

後世の都市開発の影響を受けず

自然的な条件も保存に幸いする

(3) 総合的な文化遺産としての価値

諸寺院（東大寺・興福寺・薬師寺・唐招提寺など）の建造物・仏像／

正倉院の宝物

各分野の同時代の文化遺産が同じ地に存在－総合的な時代像を把握しうる

(以上)

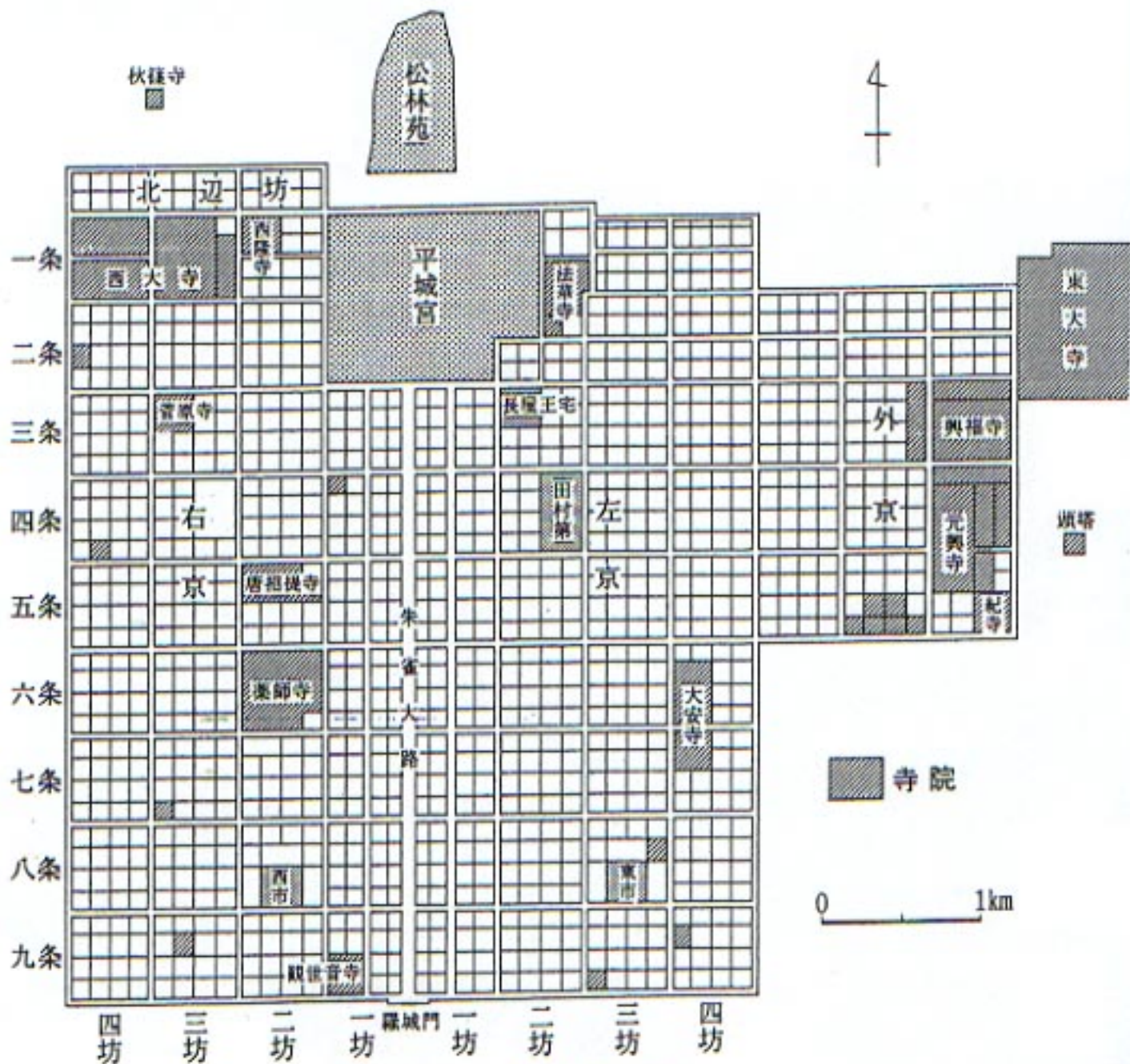


図1 平城京の街割り

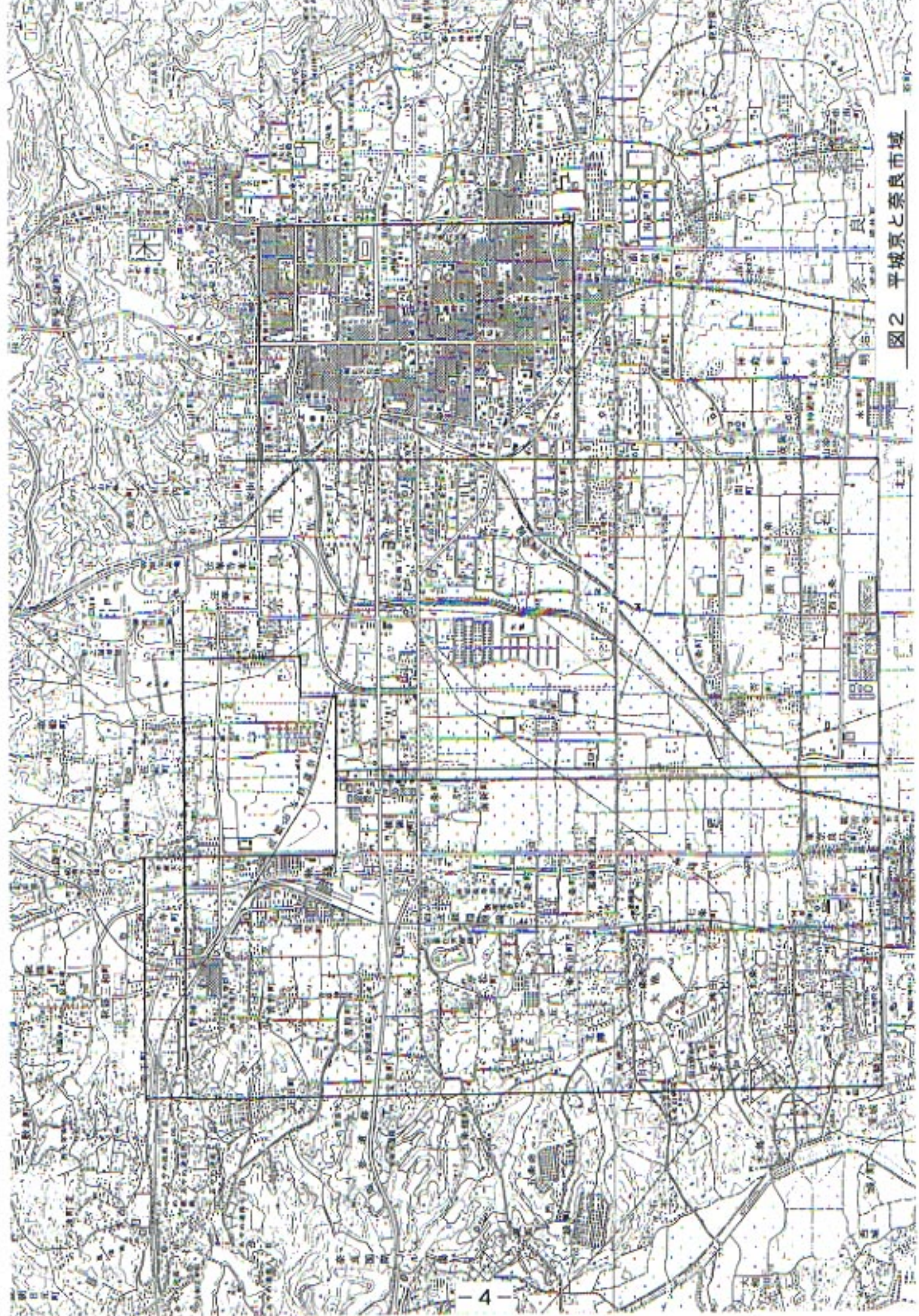


図2 平城京と奈良市域

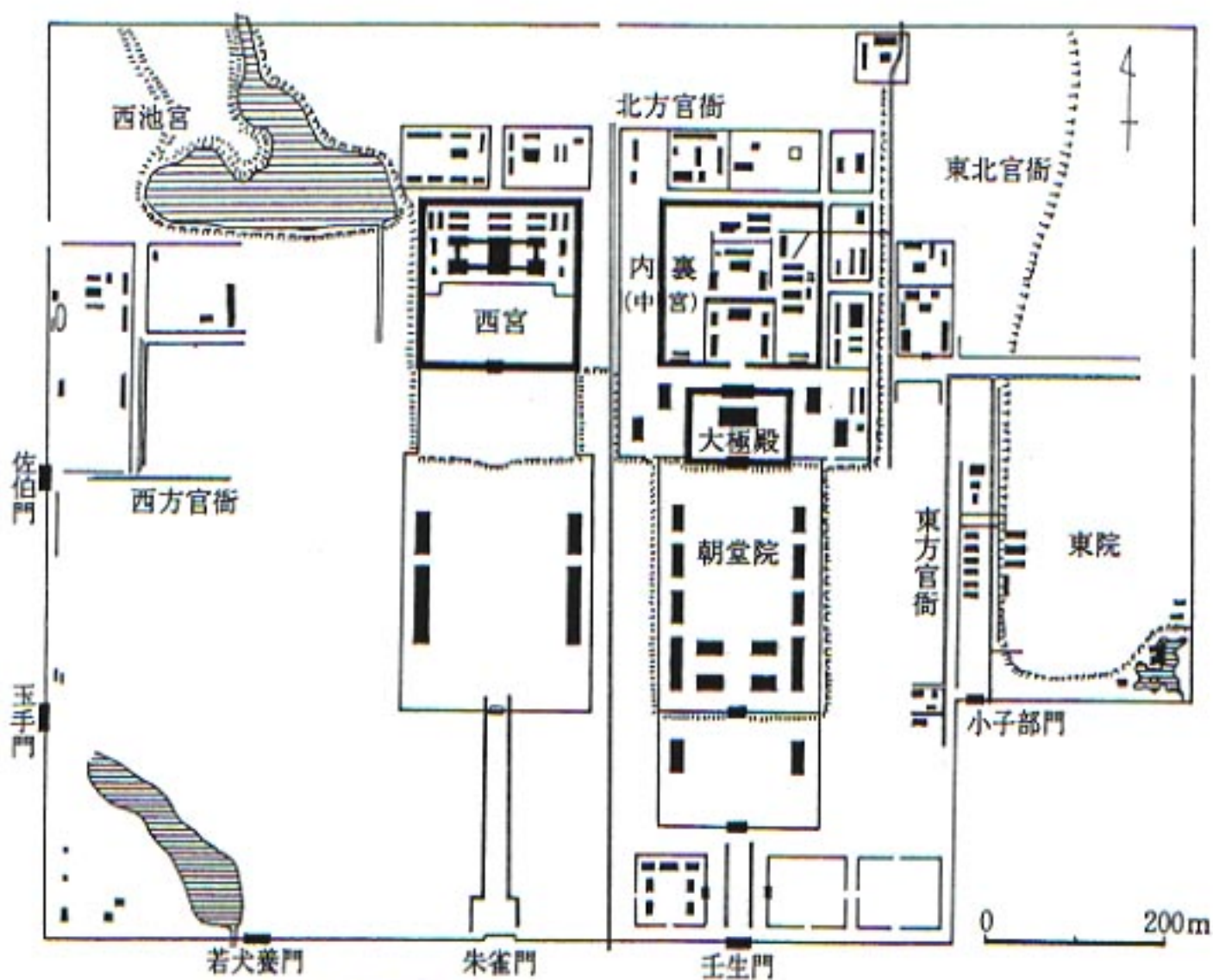


図3 平城宮の主要遺構(8世紀後半)